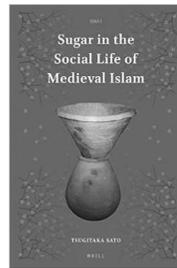


新刊紹介



Sato Tsugitaka, *Sugar in the Social Life of Medieval Islam* (Islamic Area Studies, 1), Leiden: Brill, 2014

佐藤 健太郎

北海道大学大学院文学研究科
准教授

本書は、オランダの Brill 社から刊行されるイスラーム地域研究の英文モノグラフシリーズ Islamic Area Studies の記念すべき第一巻であると同時に、二〇一一年四月に亡くなるまでイスラーム地域研究の研究代表をつとめた故佐藤次高先生の遺作でもある。

本書の内容は、二〇〇八年に出版された『砂糖のイスラーム生活史』（岩波書店）を基にしつつも単なる英訳ではなく、その後刊行された新しい研究の知見も加えた増補改訂版ともいえるものとなっている。砂糖がイスラーム世界に広がる過程から説き起こし、砂糖きび栽培や砂糖精製、商人たちの砂糖取引、権力者と砂糖との関わり、さらには医療や料理の中の砂糖にいた

るまで、実に様々な側面からイスラーム社会と砂糖の関わりが描かれている。本書の第一の特徴は、著者のこれまでの仕事と同様、徹底的に一次史料に基づく姿勢である。医学書や料理書など史料としてあまり使われることのないジャンルの文献も幅広く用いられている。もう一点特筆すべきなのが、具体性にこだわった叙述である。圧巻とも言えるのが砂糖きび栽培と砂糖精製の記述であり、表紙を飾る謎の素焼きの壺もあいまって、読者を何百年も昔の砂糖精製の現場へと誘ってくれるだろう。

病魔に冒された後も、著者がイスラーム地域研究の激務の間をぬって本書の執筆を進めていたのは、評者も承知していた。しかし、原稿が完成していたことを知ったのは、葬儀の場でご遺族から原稿の整理を依頼されたことである。受け取った原稿の電子ファイルには、亡くなる一ヶ月半前のタイムスタンプが残されていた。病床にありながら本書を完成させた著者の使命感には、強く心を打たれた。

英文モノグラフシリーズ Islamic Area Studies は、今後も続刊が予定されていると聞く（なお、本シリーズの詳細については、本号に掲載されている三浦徹先生による「Islamic Area Studies Series の刊行開始」を参照されたい）。国内外のすぐれた研究成果が次々にこのシリーズを通して世に問われることは、きっと本書の著者の遺志にもかなうことであろう。



バラズリー著 花田宇秋訳
『諸国征服史』全三巻（イスラーム
原典叢書）
岩波書店、二〇一二年二〇一四年

荒井 悠太

早稲田大学大学院文学研究科
博士後期課程

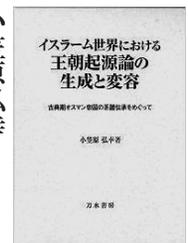
本書は「イスラーム原典叢書」シリーズの一冊であり、アッバース朝時代の歴史家バラズリー (Ahmad b. Yahya b. Jabir al-Baladhri, ?-892 頃) の著作 *Kitab Futuh al-Balad* の全訳である。訳者によれば、バラズリーはバグダードのペルシア系家系の出身である。彼はワーキデーの弟子にして『学者大列伝』*Kitab al-Tabaqat al-Kabir* の著者でもあるイブン・サアド等に師事し、またシリア各地を旅行して多くの学者達と交流した。ペルシア語とアラビア語の双方を解し、詩才も備えた教養人であった。

本書は預言者モスクに纏わる種々の伝承にはじまり、ムハンマドによるアラビア半島の征服からリッダ戦争そして西はイベリア半島、東はインド（インド）に至るまでの大征服の過程を地域別に叙述する。また訳者が本書の構成・内容を「イスラーム国

家社会の動態的構造の叙述」と評するよう
に（第三卷一九〇頁）、征服記事の合間
にはディーワーンのアラビア語改変や都市の
造営、ハラージュ地の規定、年金、印璽そ
して貨幣鑄造に関する章が設けられ、大征
服期における国家組織の形成過程が描き出
されている。また訳者は、本書が大征服よ
りも大分後代に執筆された歴史書でありな
がら、伝承経路 (path) が明示されてい
るために史料批判が可能であり、一次史料
としての価値を持つと述べる。バラズ
リー自身「これらの情報を適当に簡略化
し、さらにはばらばらの情報を筋の通った話
にして読者に伝え」た（第一卷三頁）と記
すように、彼は自身の判断に基づいて伝承
を取捨選択している。こうした史料批判の
方法は、バラズリーが優れた歴史家であ
ると同時に、伝承学にも精通していたこと
を示していよう。

本書の叙述は伝承を序列化し、信頼性の
高いものから順に挙げる形式でなされてい
る。専門性の高い用語や表現も含まれてい
るが、訳文自体は大変読み易いものであり、
また豊富な訳注は内容を理解する上で大い
に助けとなる。本書の刊行は我が国におけ
るイスラーム初期史研究の進展に大きく寄
与するものであり、研究者ならば必読の書
である。

最後に、本翻訳は人間文化研究機構（N
IHU）プログラム「イスラーム地域研究」
の成果の一部であることを付言しておく。



小笠原弘幸

『イスラーム世界における王朝起源
論の生成と変容——古典期オスマ
ン帝国の系譜伝承をめぐって』

刀水書房、二〇一四年

山下 真吾

東京大学大学院人文社会系研究科

博士課程

本書は、古典期のオスマン帝国を例にと
り、王朝起源論を、王朝の系譜、始祖伝
承、先行諸王朝との関係などの観点から、
言説史のアプローチを用いて論じた研究で
ある。

問題設定と研究史や史料のまとめなどを
含む序論に続き、第一部では、「四人の始
祖」の標題のもとに、オスマン王朝の起源
を示す系譜や伝承の展開が扱われる。著者
は特に、トルコ系オグズ族に伝わるオグズ
伝承に基づく始祖伝承と、旧約聖書に基づ
く始祖伝承の二つに注目する。そしてま
ず、オグズ伝承について、一五世紀におけ
るカユ説とギョク説が併存した事を明らか
にする。また次に、一五世紀後半以降、旧
約聖書に端を発する伝承に基づく始祖ヤベ
テ説と始祖エサウ説の展開を論じた後に、
カユ説とエサウ説それぞれの勝利、カユと

エサウの同一視が一六世紀に起った事、そ
の背景や、その後の展開などについて議論
する。

第二部では、「二つの王朝」の標題のも
とに、オスマン朝と、それに先行する二つ
の王朝、すなわちセルジューク朝及びモン
ゴルとの間の系譜・同族意識が扱われる。
著者はまず、セルジューク朝について、
一五世紀のオスマン朝の歴史叙述におい
て、同王朝との同族・婚姻関係が繰り返し
主張された事を明らかにする。こうした主
張は、一六世紀にはなされなくなるか、下
火になり、またセルジューク朝の起源につ
いて多様な主張がなされなくなるとい
う。また、オスマン朝建国伝説の中で、破壊者
として否定的に描かれてきたモンゴルであ
るが、一六世紀に入ると高い評価を受ける
ようになり、これと並行してオスマン朝と
の同族主張がなされるようになったとされ
る。本書は、古典期オスマン朝における起
源・系譜伝承を包括的に扱った初の試みで
あり、是非一読すべきものである。



梶屋友子

『イスラームの写本絵画』

名古屋大学出版会、二〇一四年

鎌田 由美子

慶應義塾大学経済学部

専任講師

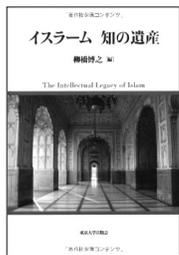
本書は、イスラームの写本絵画について、その発生から一六世紀に至る変化と発展を考察する大部の研究書である。イスラーム美術史を専門とする著者による該博な知識と奥深い考察をもとにした本書から、読者はイスラーム絵画を鑑賞し、そこから情報を読み取る方法を知ることができ

る。まず、第一部の「イスラーム絵画の基礎知識」ではイスラーム地域における絵画の種類、写本の素材、構成と制作方法、写本絵画の歴史について概観される。

続く第二部の「イスラーム写本絵画鑑賞」では、個々の写本絵画に焦点を当て、画家による画面構成の方法と場面設定の工夫について考察される。著者はまず、画面構成を「立面図画面」、「並列画面」、「俯瞰図画面」に分類しているのだが、こうした観点を導入することは従来のイスラーム絵画史研究においてもなされておらず、示唆に富む。次に、ある場面の場所と時間を絵画空間に表す際に、画家がどのような工夫を行ったのかを考察する。そのうえで、イスラームの写本絵画の大きな特徴である、絵画の枠外へのはみ出しと細部表現の変遷を、萌芽期である一三世紀からサファヴィー朝時代まで、作品に即して跡付けている。一一一枚ものカラー図版と、著者によるディスクリプションの深さに引き込ま

れて、読者はイスラーム写本絵画の鑑賞方法を知ると同時に、その楽しさを味わうことができる。その一方で、著者は写本の巻頭口絵にも着目し、それがどのような意図を持って描かれたのかも考察している。

第二部の最終章では、イル・ハーン朝時代の写本絵画における革新に焦点が当てられる。『歴史集成』写本の中国史の部分のテキストと挿絵を照らし合せて、当時の画家が中国の風俗などをどのように絵画化しようとしたのかを詳細に分析した部分は、イスラーム絵画史の国際的な研究状況を推し進めるもので、特筆に値する。詳細な脚注と参考文献も付されており、イスラームに関するさまざまな分野の研究者に寄与するところの大きな書物である。



柳橋博之(編)

『イスラーム 知の遺産』

東京大学出版会、二〇一四年

西村 淳一

早稲田大学イスラーム地域研究機構

主任研究員

イスラームを研究する者、とりわけその歴史的事象を扱う者は、研究上しばしば参照する使い慣れた文献資料、あるいはそれ

ほど使う機会はないが愛着を感じている文献資料というものを一つや二つは持っているものである。そういった自家薬籠中の資料ないし資料ジャンルについて、一〇人の研究者が論文という形で自身の思いの丈を文章にし、それらを一冊にまとめたのが本書である。本来の企画としては、編者曰く、「日本イスラーム協会の創立五〇周年記念事業の一環として」中略「イスラーム研究に携わってきた会員に、その研究の資料としてきた作品を研究者よりはもう少し広い読者層に紹介してもらうこと」(一頁)を狙ったという。しかし本書は一言で形容すれば「硬派な」論文集であり、一般の読者が通読することはなかなか難しいかもしれない。冒頭から読むことにこだわらず、読者自身が興味をひかれた論文から読むことをお勧めする。

本書は全一〇章から成り、各章は一論文から成っている。具体的には次のような構成となっている。【第一章】吉田京子「クライニー『充全の書』基本原理の部」——一ニイマーム・シアア派伝承学の基礎理念」、【第二章】阿久津正幸「フアーラービー『諸学通覧』——知識のネットワーク化とムスリム社会」、【第三章】森山央朗「『地方史人名録』——ハディース学者の地方観と世界観」、【第四章】柳橋博之「ジュワイニー『ニハーヤ』——シャーフィイー派法学の展開」、【第五章】菅原陸「ユースフ『クタドゥグ・ピリグ』とカシユガリール『チュルク語諸方言集成』——一世紀チュルク諸語とイスラーム」、【第六章】小

野仁美「法学者間の学説相違の書」——イスラーム法の規範と柔軟性」【第七章】堀井聡江「ムハンマド・カドリ」『ムルシド・アル・ハイラン』——イスラーム法学の近代」【第八章】佐々木紳「ナムク・ケマル」『祖国あるいはスイリストレ』——一九世紀オスマン帝国の愛国的戯曲をめぐって」【第九章】山崎和美「『セディーゲ・ドウラターバーディー作品集』——女子教育推進に尽力した近代イランの女性知識人と社会の反応」【第一〇章】齋藤剛「ムフタール・スーサー」『治癒をもたらす妙薬』——モロッコ南部ベルベル人とイスラーム的知の伝統」。各論文の内容は副題を見れば何となく察することができるようになっている。いずれも情報量が多く示唆に富んでいる。資料に馴染みのない他分野の研究者にとってこそ有益であろう。

言うまでもないが、ムスリムが七世紀以降に各地で書き残してきた文献は膨大な数にのぼり、文献ジャンルも多岐にわたっており、本書はそのほんのごく一部を紹介しているにすぎない。本書のような試みを単発で終わらせることなく、たとえ一般受けせずとも同様の論文集をシリーズ化してこそ、真にイスラームの「知の遺産」の豊かさを示すことにつながるのではなからうか。



久志本裕子

『変容するイスラームの学びの文化』——マレーシア・ムスリム社会と近代学校教育』

ナカニシヤ出版、二〇一四年

坪井 祐司

東京外国語大学

アジア・アフリカ言語文化研究所

研究員

本書は、マレーシアのイスラームにおける学びの文化の近代化にもなる変容に焦点をあてる。著者は、学校教育として制度化されたイスラーム学習の普及は、伝統から近代へとという単線的な発展ではないと強調する。伝統的な学びの文化には近代的教育では代替できない部分があり、現在も根強い支持を得ていることを文献資料とフィールドワークによる民族誌的データで明らかにする。

第一部は、第二次大戦以前のマレー半島における伝統的なイスラームの学びの歴史が描かれる。寄宿塾（ポンドック）における伝統的な学びの形態の特徴として、宗教書（キターブ）と教師の絶対的権威が指摘される。二〇世紀前半、イギリスの植民地統治下で近代的学校教育が普及し始める

と、イスラーム知識人たちは積極的にイスラームの学びの制度化を主張し、宗教学校の近代化・標準化が進んだ。

第二部では、イスラーム復興の動きが強まった一九七〇年代以降の国家による教育の制度化の過程が描かれる。近代教育を受けたイスラーム指導者が登場し、イスラーム復興（ダアワ）運動が生じた。政府の「イスラーム化政策」のもとで「イスラーム教育」の教科化が起り、宗教学校への国家管理の強まりのなかでウラマーも官僚化した。

第三部では、そうした近代的制度に違和感を覚えるムスリムの実践が描かれる。あえて学校制度の外にあるマドラサに通うムスリムがいる一方で、公的な学校制度を補う学びの場として「モティベーション・セミナー」が参加者を集めるなど、伝統的な学びの要素は現在のイスラーム学習のなかにさまざまな形で継承されている。

結論では、イスラームの学びの文化は近代的学校制度の諸要素を取り込んで変化したが、一方的にそれに近似していくものではなく、揺り戻しが起こる可能性があること指摘される。本書は、経済発展（近代化）とイスラーム復興が同時に起こったマレーシアのムスリムの宗教実践を描写している。マレー・ムスリム内部の多様性や多民族社会における宗教のあり方を考えるうえで、興味深い事例を提示しているといえよう。



須永恵美子

『現代パキスタンの形成と変容——イスラーム復興とウルドゥー語文化』

ナカニシヤ出版、二〇一四年

登利谷 正人

上智大学イスラーム研究センター

特別研究員

本書は現代パキスタンをイスラーム復興とウルドゥー語出版の広がりという観点から考察し、パキスタンという国家のアイデンティティとは何か、同国におけるウルドゥー語の役割とは何か、さらにはイスラーム復興がパキスタンにおいてどのように展開してきたのかという三点の問いを立てて論じている。以下では構成に沿って簡単に内容を紹介する。

第一部の第一章・第二章ではパキスタンの領域や居住する諸民族、国教規定などについて触れられると共に、南アジアにおける言語状況、特にウルドゥー語の位置づけについて述べられ、続く第三章では初等・中等学校の国語（ウルドゥー語）・社会科・パキスタンの教科書中において、自国を中心としたムスリム社会がどのように記述されているのかという点について論じ

ている。

第二部の第四章では一八世紀から現在に至るまでの南アジアにおける印刷業界の形成と発展過程について明らかにし、続く第五章ではイスラーム復興の動態についてクルアーンの注釈書（タフスィール）の発展と言語との関係に着目して議論している。

第三部では、南アジアの代表的なクルアーン注釈書（タフスィール）を記した人物であるマウドゥーデーの生涯について第六章で触れた後、第七章において彼によって三〇年をかけて執筆されたウルドゥー語のタフスィール『クルアーンの理解』の出版状況について明らかにした後、その内容の分析を通じて執筆意図と対象者などについて多角的に論じている。

本書全体を通じて、出版活動が急速に拡大する南アジアにおけるイスラーム復興がウルドゥー語を媒介言語として進展したため、その過程でウルドゥー語がイスラームを議論する共通言語としての地位を獲得し、これを用いたマウドゥーデーなどのイスラーム思想が広範な人々の間に大きな影響力を有するに至った点が体系的に理解できる。世界最大のムスリム人口を抱える南アジア地域のイスラームを理解する上で必携の書である。



小杉泰

『九・一一以後のイスラーム政治』

岩波書店、二〇一四年

福永 浩一

上智大学大学院グローバル・スタディーズ研究科

地域研究専攻博士後期課程

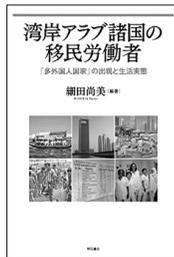
本書は九・一一事件で世界に衝撃を与え、二〇一〇年末以降「アラブの春」を経て国際社会の場で影響力を拡大し続けているイスラーム政治運動をテーマとして、中東地域・イスラーム思想研究を代表する筆者が、二一世紀におけるその実態と今後の展望について総体的に論じた大作である。筆者は表題の「イスラーム政治」を、近代西洋との邂逅で浸透した政教分離や世俗主義等の思潮に対して、自立的に宗教と政治の包括を志向した現代的なイスラーム復興思想の産物と定義する。そして九・一一を契機にイスラーム諸国内の問題から、国際政治の不可分の要素となり、外部と内部の影響を受けつつ変容を続けていると指摘する。

本書の構成を簡潔に紹介すると、第一部『現代イスラーム政治の争点』ではまずイスラーム政治の活力の源泉として当該社会の人口の増加が挙げられる。続いて新しい

ジハードの概念とアルカイダの出現、「反テロ戦争」時代における宗派対立や国家に捉われないイスラーム武装組織の設立という現象が、宗教の国際化として概括される。第二部『イスラーム政治の原点』で筆者はイスラーム政治発展の背景として、イラン革命、アフガニスタンでの闘争やサウディアラビアの内包する課題、絶え間なく続く中東での戦乱から生まれたイスラーム組織の台頭の事例を扱う。第三部『グローバル化の中のラジカリズム』では、九一一以後の西洋の反イスラーム感情の昂揚と、その問題に対し宗教共存や西欧在住のムスリム思想家による両者の価値観の調和の試みが紹介される。第四部『二一世紀の国際社会とイスラーム』は「アラブの春」後の中東政治の混乱の状況、特に民主化革命下で、それに伴うイスラーム復興が否定されるジレンマについて、各地の具体的事例を踏まえつつ考察する。その上で現在の国際社会におけるイスラーム政治の位置づけや新たな現象を分析し、武力衝突ではない共存の思想の受容が、将来の世界の安定に不可欠であるとの問題提起を行う。

これまでイスラーム復興に関する著作を多数発表してきた筆者の手による本書では、イスラーム法解釈の歴史の変容から現代の武装闘争、イスラーム金融、性や生命倫理、インターネットの普及に至るまで幅広い題材が取り扱われる。その全てをここで紹介することは出来ないが、いずれの個別事例も背後の思想分析を土台としつつ、特定の分野や地域に捉われない有益な示唆

に富む議論がなされ、現代のイスラーム世界の特徴を理解する上で最適の一冊といえる。何より本書の主題であるイスラーム政治と不可分の戦乱、それと無縁ではいられなくなった現代国際社会の、イスラーム的価値観に対する摩擦や共生の試みといった大局的な観点に関する筆者の提言は「アラブの春」への反動に由来する中東域内の対立の激化、昨今のイスラーム国の勢力拡大で融和の思想の実践が困難さを増している中、より重みをもって受け止められるべき課題である。日本が既存の西洋的観点のみに捉われず、イスラーム世界といかに関係構築していくかを考察するためにも必読の書といえよう。



細田尚美（編著）

『湾岸アラブ諸国の移民労働者——「多外国人国家」の出現と生活実態』

明石書店、二〇一四年

福田 安志

早稲田大学イスラーム地域研究機構

上級研究員

本書はGCC諸国の移民労働者について取扱ったものである。

編著者の細田尚美氏は二〇〇八年から

二〇一三年にかけて二回の研究会を組織し（「ドバイ研究会」(二〇〇八―二〇一〇年度)、「湾岸移民研究会」(二〇一―二〇一三年度)）、いずれも科研費によるもの）、ドバイで働くフィリピン人女性についての実態調査から始めて、GCC諸国における移民労働者の研究を深めていった。その研究の特徴は、受入国と送り出し国の双方の視点から研究を行ったもので、多くのフィリピン研究者やGCC諸国を研究している研究者たちが研究に参加したことである。

二〇一〇年にはイギリスのエクセター大学での湾岸地域をめぐる国際会議で、パネルを組織して研究成果を発表し、そのことを通して、世界の研究者との意見交換も進めた。本書の執筆者たちはそうした研究活動の成果として本書を取りまとめたものである。

GCC諸国に多数の外国人が働くようになったのは、一九七三年のオイルショック後に急激な経済発展を続ける中で労働力が不足し、外国人労働力への依存を強めたためである。一九七〇年代後半から八〇年代にかけて何百万人ものインド人、エジプト人などの出稼ぎ外国人がGCC諸国に働きに行くようになり、各国の開発や経済で大きな役割を担うようになった。その当時は、出稼ぎ外国人についての数多くの文献・資料が刊行されていた。

しかし、一九八〇年代半ば以降、原油価格が低迷し長い不況の時代に入ると、GCC諸国の経済や社会に対する研究者の関心

は薄れ、出稼ぎ外国人についての研究が発表されることもまれになっていった。

そうした状況は二〇〇〇年代に入ると大きく変わってきている。原油価格は二〇〇四年頃より上昇し、その後、昨年になるまで一〇年近く高値で推移し、GCC諸国の経済が再び急拡大するなかで経済や社会への関心が強まったからである。

働いている外国人についても大きな変化が起きている。一九九七年にGCC諸国全体で約一〇〇万人であった外国人の数は二〇一四年には二三〇〇万人へと急拡大した。メイドなどの需要が増える中で、出身国もエジプト人などのアラブ人が減少する一方で、フィリピン人などのアジア人（非アラブの）が増加している。

本書は、そういった新しい段階に移ったGCC諸国の外国人について取扱った研究書である。



千葉悠志

『現代アラブ・メディア——越境するラジオから衛星テレビへ』

ナカニシヤ出版、二〇一四年

福田 安志

早稲田大学イスラーム地域研究機構

上級研究員

チュニジアで二〇一〇年末に始まったいわゆる「アラブの春」は、翌年、エジプトのムバラク大統領を倒し、瞬く間にアラブ世界に広がった。そのことの背景には、アラブ世界の共通言語であるアラビア語の存在と、同時に、アラビア語の衛星放送などのメディアが大きな役割を果たしたことがあると指摘されている。

本書は、著者が「この地域のメディアには国境を越えた歴史のかつ重層的な結びつきが存在している」と述べているように、アラブ世界におけるメディアの発展を跡付けながら、メディアが作り出しているトランスナショナルな空間について明らかにしようとしたものである。そのために、本書では、メディアを取り巻く各国の政治・社会状況について検討し、また、新聞・ラジオの時代から衛星放送の時代へと、メディアをめぐる変化にも注意を払いながら、アラブ・メディアが歴史的に果たしてきた役割と現在の位置について明らかにしようとしている。

本書は大きく二つの部分からなっている。第一部の「アラブ・メディアを論じる視覚」では、先行研究、分析枠組みについて論じられ、対象となるアラブ地域について述べられている。

第二部の「アラブ・メディア圏の形成と展開」では、一九五二年のエジプト革命後のエジプトでのメディア政策について取り上げられ、そしてラジオやカセットテープなど国家の統制をかくくぐり国境を越えて情報と思想を伝えたメディアについて取り

上げられている。

第三部の「衛星放送時代の到来とアラブ・メディア圏の新展開」では、アル・ジャジーラなどのアラビア語の衛星放送の普及によって従来のメディア圏がどのように変化したかについて述べられている。

「アラブの春」を経てアラブ世界の政治は流動化しており、そこでのアラブ・メディアの果たす役割に注目が集まっている。本書は、時宜をえた出版であり、読者の関心にこたえてくれる好著である。



辻上奈美江

『イスラーム世界のジェンダー秩序——「アラブの春」以降の女性たちの闘い』

明石書店、二〇一四年

森田 豊子

鹿児島大学・大阪大学

非常勤講師

本書の表紙はバハレーンでデモ行進をしている女性たちの写真で、筆者は取材中、デモ隊に向けられた催涙ガスを自らも浴びている。本書はそのような豊富な現地取材をもとに「アラブの春」以降も刻々と状況の変化する女性たちの闘う姿を描いてい

る。

本書では、チュニジア、エジプト、パハレーン、サウジアラビア、モロッコの五か国が取り上げられ、「アラブの春」の契機となったチュニジアでの事件、およびエジプトのタハリール広場における性的暴行事件などから読み取れるジェンダーの問題（第一章）、各国の女性たちの経済状況や教育レベルなどの統計的なデータの比較・検討（第二章）、「アラブの春」以前の女性たちによるフェミニズム運動やジェンダー政策（第三章、第四章）、さらに「アラブの春」以降の女性に対する暴力やジェンダー政策の変化など、各国の女性たちをめぐるさまざまな経験（第五章から第六章）を論じている。

多様な現象について国家、「イスラーム」、女性たちのエイジェンシーを軸にして議論が進められている。「アラブの春」で政変が起きたか否かにかかわらず、各国は変化を求められた。男性中心の国家運営において、いかに女性の地位を規定するのか、ジェンダーとイスラームの問題にどう折り合いをつけるのかなどの問題に直面したのだ。アラブ社会における女性たちの公的領域への進出が、男性たちに「男性性の危機」と捉えられ、女性への暴力へとつながることもあった。そんな中、女性たちは西欧世界で目指されたような「女性解放」とは必ずしも軌を一にしない、国家や宗教への抵抗、あるいは受容という多様な形で、そのエイジェンシーを発揮したという。

カンディヨティの「アラブの春」後を

「従来通りの家父長制のみでとらえるにはあまりにも単純すぎる」との議論を本書の多様な女性たちの経験が裏付けている。今後、これらの経験が、ジェンダー諸理論にどう影響を与えるのかに注目していきたい。「アラブの春」を多様な視点から捉えたいという方にお勧めしたい。



長谷部史彦（編著）

『地中海世界の旅人——移動と記述の中近世史』

慶應大学言語文化研究所、二〇一四年

荒井 悠太

早稲田大学大学院文学研究科

博士後期課程

本書は、慶應大学言語文化研究所の公募研究「前近代の地中海世界における旅をめぐる知的営為と記述」（二〇一〇年四月～二〇一二年三月）の成果の一部であり、一〇世紀から一八世紀までの地中海世界における「旅」を主題とした一二の論攷が収められている。

各論攷は個々の旅行者の経験のみならず、科学や宗教、旅行の背景にある政治的・社会的状況などを幅広く取り扱っている。

る。

岩波、太田、栗山論攷では科学に焦点が当てられる。科学知の伝播（岩波論攷）、クスター・イブン・ルーカーの巡礼医学書からみた旅と医療（太田論攷）、船と季節風・暦（栗山論攷）というように、旅行をする上で不可欠な科学的知識がそれぞれ取り上げられている。

関、守川、佐藤論攷では、旅行と宗教・宗派上の問題に焦点が当てられる。関論攷はイベリア半島から追放されたユダヤ人、コンベルソ、マラーノの足跡、守川論攷はサファヴィー朝のイラン人カトリック信徒とシーア派ムスリムという二人の改宗者の旅と信仰の変化、および信仰を巡る葛藤を描き出す。これに対し、モリスコのハジャリーを取り上げた佐藤論攷では、ハジャリーがムスリムの地に旅した際にキリスト教徒と間違われるなど、同じムスリムでありながら現地人から向けられる疑いの目に困惑する様子が浮き彫りにされる。

藤井、神崎、森本論攷では旅行者自身の「外」への視点が中心となり、異郷あるいは異端の地での見聞を記録した、個性溢れる各旅行記が分析される。藤本論攷はエヴリヤ・チェレビーの旅行記を基に、オスマン帝国における旅行者の環境を提示する。長谷部論攷はイブン・バットウータの口述に基づく『贈物』のナイル・デルタ情報を分析し、史料の独自性とそこに織り込まれた虚構とを明らかにする。櫻井論攷は「聖墳墓の騎士」の実態を聖地巡礼記における関連記述から再構築するというもので、歴

史研究における旅行記・巡礼記の史料価値の高さが窺える。

イスラーム史研究者と西洋史研究者が垣根を越えて集った本書は、前近代における人の移動・交流を様々なレヴェルで描き出すことに成功しており、多くの読者に有益な示唆を与えてくれるものといえよう。



堀川徹、大江泰一郎(編)

『シャリーアとロシア帝国——近代中央ユーラシアの法と社会』

臨川書店、二〇一四年

長沼 秀幸

東京大学大学院人文社会系研究科
博士課程

本書は「中央アジア法制度研究会」および「中央アジア古文書研究プロジェクト」という二つの研究プロジェクトの成果をまとめた、一〇篇の論考(序章は除く)からなる論文集である。序章では、本書の問題関心として、従来の研究においてムスリム諸語で作成されたイスラーム法廷文書の利用が進んでいないこと、およびロシア統治下の中央アジアにおける現地法制度の変容について未解明な点が多いことがあげられる。

第一章大江論文は、所有権を軸にロシアと中央アジアの双方における法文化を比較し、両者の間には多くの類似点が存在すると指摘する。第二章塩谷論文は、イスファンディヤール・ハンが発した勅令の写しである三八九四文書を用いてヒヴァ・ハン国における国有地の払い下げの実態を明らかにする。第三章野田論文は、ロシアのイリ占領期に残されたイリ地方官房文書を用いることで、遊牧民がもつ「慣習法(adat)」の一九世紀後半における運用の実態を考察する。第四章磯貝真澄論文は、オレンブルグ・ムスリム宗務協議会で作成された文書を中心に分析し、一九世紀後半のヴォルガ・ウラル地域におけるムスリムの間で行われた遺産分割にかかる諸問題の法的・行政的处理を考察する。第五章磯貝健一論文は、カーディーが審理終了後に発行する「タブキラ」を呼ばれた審理記録を中心に分析することによって、ロシア統治下のトルキスタンにおける裁判関連文書の作成システムを論じる。第六章矢島論文は、トルキスタン総督府管轄地域に導入された上訴と審級制度がもつた意味について考察すること、これらが検事監督制度として機能し、現地社会におけるカーディーおよびイスラーム法の権威の低下を招いたと結論する。

第七章近藤論文および第八章桑原論文は、ロシア統治下にはない地域を扱うことで比較の視点を提供する。前者では、一九世紀末のアミール・アブドゥッラフマーン・ハーンによるアフガニスタンにおける司法

改革、特にイスラーム法裁判制度を、後者はイギリスによる植民地化初期のマレーシアにおける「近代法」移植の法的論理を考察する。第九章伊藤論文は、ソ連における裁判官の役割を西欧法と比較する作業を通じて、イスラーム法とソ連法の共通性を今後の研究の展望として提示する。第一〇章宮下論文は、筆者が携わった独立後ウズベキスタンにおける担保法にかかわる支援事業の内容を紹介し、同国における「法」の役割が限定的である現状を指摘する。

以上、ごく簡単に本書の要約を試みた。空間的に広大で時間的にも長期にわたる中央ユーラシアの近代を、法を軸に様々な視点から論じた本書における各論考はどれも刺激的な内容となっている。未解明な部分の多い「シャリーアとロシア帝国の対話」の様相を知る上で本書がもつ意義は大きい。



塩谷哲史

『中央アジア灌漑史序説——ラウザン運河とヒヴァ・ハン国の興亡』

風響社、二〇一四年

秋山 徹

早稲田大学イスラーム地域研究機構
研究助手

本書は、著者が二〇一一年に東京大学大学院人文社会系研究科に提出した同タイトルの博士論文に加筆修正のうえ出版されたものである。

中央アジア南部は大河川が流れ、その流域に定住農耕オアシス地域がひろがる。本書は、その中でも、アムダリヤ河流域に生まれたホラズム・オアシスに着目する。同地域を含めた中央アジア・オアシス地域については、ロシアの東洋学者V.V.バルトリドを中心に、一次史料にもとづく実証的な研究の蓄積がある。本書は、そうしたバルトリド以来の研究手法を受け継ぎつつ、著者が収集した新たな史料にもとづいて、一九世紀前半から二〇世紀初頭における同地の政治権力——ヒヴァ・ハン国——の動態を灌漑史の展開と絡めながら活写する。

第一章「ヒヴァ・ハン国の成立とトルクメンの移動」では、一九世紀前半のヒヴァ・ハンたちが実施した灌漑事業の背景を解明し、ハン国政権と遊牧勢力トルクメンとの関係の変化を明らかにする。こうした作業を踏まえ、第二章以降は、一八七三年同政権のロシア帝国による征服・保護国化以降の状況を扱う。第二章「帝政ロシアのアムダリヤ流転計画とヒヴァ・ハン国」では、ロシアによって計画・実施された灌漑事業に着目し、それらの現地社会への影響について考察する。第三章「ハンと企業家——ラウザン農園の成立と終焉一九一三—一九一五年」・第四章「帝政末期アムダリヤの水利権をめぐるロシアⅡヒ

ヴァ・ハン国関係」は、宮廷貴族アンドロニコフ公をはじめとするロシア人企業家がハン国政府とともに計画した灌漑事業を取り上げ、事業推進の目的と過程を明らかにする。

本論における精緻かつ丹念な考察を踏まえて、「結論」において著者は、①中央アジアにおける水資源問題史、②帝政ロシアの進出前後を通じた中央アジア史の動態、③ロシア帝国論という、より大局的な三つのパースペクティヴへの提言と問題提起を行なう。このように個別実証研究のレヴェルを超えた本書は、中央アジア近代史の研究者のみならず、より広範な読者層に多くの豊かな示唆を与え得るものである。なお、本書は第四回（二〇一四年度）地域研究コンソーシアム賞・登竜賞を受賞した。



秋葉淳、橋本伸也（編）

『近代・イスラームの教育社会史——オスマン帝国からの展望（叢書・比較教育社会史）』

昭和堂、二〇一四

鈴木 真吾

慶應義塾大学大学院文学研究科

後期博士課程

本書は、『叢書・比較教育社会史』シリーズの一冊として編まれた論集である。このシリーズはこれまで、「身体と医療」「ナシヨナリズム」「実業世界」「教師」「帝国」「女性」「識字と読書」といった視座から教育を扱ってきた。その「展開篇」に位置づけられた本書は、近代のオスマン帝国に時代と地域を限定している点で、既刊の同シリーズと趣を異にしている。これは、比較の上で中東・イスラーム地域がほとんど等閑視されてきたこと、それゆえこうした編集方針を取ることで、同地域を教育史の比較の俎上に載せようとする意図が背景にある。

かかる事情から、専門外の読者を念頭に編まれていることが本書の特徴としてまず挙げられる。例えば、必要な前提知識が得られるよう各部の冒頭に導入が配されるなどの工夫がなされている。

序章と終章を含め全二一章から成る本書では、オスマン帝国における教育が多面的、立体的に検討されている。例えば一章ではマクタブやマドラサといった「伝統的」教育の変容が、二章ではメフメト・アリ政権下のスーフィーたちの知の実践やウラマーの学知との峻別が論じられる一方、三章では国家による「近代的」教育課程の導入が、六章では国家統合という政治課題との連関から、ここで使用された歴史教科書の記述と形式が分析される。対象はムスリムに限定されず、五章では非ムスリムに焦点が当てられ、特にアルメニア人の多様な教育機会が検討される。地域的にもロシ

ア帝国下のヴォルガ・ウラル地域のムスリム社会における新方式教育課程を扱った七章、ハプスブルク帝国下ボスニアの進歩的ムスリムを扱う八章を配し、教育の問題が国境線を越えて検討される。また、四章では印刷メディアの普及する帝都イスタンブールにおける新聞の読者層と読まれる場に検討が加えられ、九章では帝国内外の多言語的な出版と言論のネットワークが論じられるなど、教育と不可分な出版の問題も、知の伝達を扱う本書に奥行きを与えている。終章では、オスマン・ハプスブルク・ロシアという三帝国の教育文化が緩やかな纏まりとして論じられる。

本書は近代オスマン史の比較的若い世代の研究者による論考からなり、オスマン史研究の「今」を知るといふ点でも有意である。内外の広い読者に読まれることで活発な議論が喚起されることを期待したい。



小沼孝博

『清と中央アジア草原——遊牧民の世界から帝国の辺境へ』

東京大学出版会、二〇一四年

塩谷 哲史

筑波大学人文社会系

助教

本書は、一八世紀中葉清朝による遊牧国家ジュンガルの征服の舞台となった中央アジア草原（ユーラシア大陸中央部を東西に走る天山山脈北麓の草原地帯）における諸事件を丹念に考察することを通して、その前後の時期における清朝の国家変容および中央ユーラシアの地域秩序の変化を明らかにしようとしたものである。序論で示されている通り、中央ユーラシア史の視点から清朝の支配体制の変容を論じ、かつ今度は清朝史の視点から、その周縁に位置づけられていく中央ユーラシアの地域秩序の変化の解明に努めている。とりわけ、ジュンガル征服の過程で構築していった統治の諸政策が清朝の国家制度を形作っていく点を論証するくだりは、読者を魅了する。また多言語の史料を駆使しながら、遊牧集団の構造、清朝とカザフを中心とした中央ユーラシアの遊牧集団、隣接諸勢力との交渉および情報収集のあり方を緻密に考証する手法は、後進の手本となる。

本書は中華王朝の連続の中に清朝を位置づけるよりむしろ、支配者層を構成した満洲人の位置づけならびに中央ユーラシア史の文脈から清朝を論じる新清史 New Qing History の流れに連なる著作と評価することもできよう（本書六七頁）。この点で、省、河川流域、交易圏など多義的な「地域」の重層的な重なりのみならず一度清朝という「国家」を見直し、清代の人びとにとって清朝とは何だったのかを問う必要を論じた岸本美緒（『清とユーラシア』『講座世界史2 近代世界への道——変容と摩

擦』東京大学出版会、一九九五年、一一—四二頁）の問題提起は、本書の到達点を踏まえて、改めて問うべき課題であると思われる。

なお本書は、一八世紀中葉の遊牧国家ジュンガルの滅亡を、中央ユーラシアの周縁化の決定的瞬間と位置づけている。この周縁化とは、卓越した騎馬遊牧民の軍事力を背景に、定住民を支配しその経済力を活用した遊牧帝国（一三世紀のモンゴル帝国、一四—一五世紀のティムール帝国を代表とする）の中核に位置した中央ユーラシアが、一六世紀以降その世界史上における役割を低下させ、ついには一八—一九世紀に、その隣接諸地域に成立していた帝国（清朝およびロシア）の周縁、ないし一部に組み込まれていくという現象を示す。評者は中央アジア西部（西トルキスタンの一定住オアシス地域における灌漑史の展開を描いた拙著『中央アジア灌漑史序説』風響社、二〇一四年、四七—一三頁）において、ロシア帝国が本格化に中央アジアへと進出する直前の一九世紀前半に、定住民を主体とした現地政権が遊牧民の軍事力を統制していく事例を挙げたが、今後帝国のレベルから各地域のレベルに至るまで、中央ユーラシアの周縁化を引き起こした諸要因をめぐり、より活発な議論が必要だろう。それはひいては、少なくとも紀元前六世紀のスキタイ以降連綿とユーラシア大陸の草原地帯を東から西へ、北から南へと移動していった騎馬遊牧民の諸集団が、その足跡を残した諸地域の政治・社会・経済・

文化に与え続けた影響を、実証的に、かつ世界史の視点から問うことへとつながるからである。



川口琢司

『ティムール帝国』

講談社、二〇一四年

高木 小苗

早稲田大学文学学術院

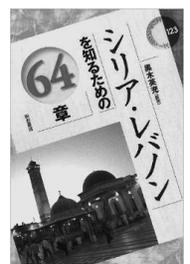
非常勤講師

本書は、かつて中央ユーラシアの広大な領域を統合したティムール朝（一三三六～一四〇五）の歴史・文化に関する待望の書である。本書が、同王朝の研究者である著者により、その「実像に少しでも迫ろうとする挑戦的な試み」として著された意義は大きい。

以下、内容を要約する。第一・二章では、創成者ティムールの家系・生年・出生地、出身地のチャガタイ・ウルス的情勢が述べられ、ティムールの政権形成の過程が、彼を含む「チャガタイ・アミール」の動向、東方のモグルル・ウルスとの関係、チンギス裔のハーン擁立、チャガタイ家の王女との婚姻によるキュレゲン（女婿）の地位の獲得、アミール達の反乱を通して描かれ

る。第三章では、かつてイル・ハーン朝がチャガタイ家から奪ったイランの地を奪回するという論理にもとづくティムールの西アジア遠征、子孫と家臣による分割統治と北インド遠征、東方遠征途上の病死までの彼の後半生、第四・五章では、王朝揺籃の地マー・ワラー・アン・ナフルとサマルカンドとケシユを中心とする首都圏、彼の建築活動とバグ（庭園・緑地）の活用が紹介される。第六・七章では、ティムール死後の内乱とシャー・ルフとウルグ・ベク父子の治世、同家の靈廟と「四ウルス叙述法」というモンゴル帝国史叙述形式の伝統形成、第八章では、サーヒブ・キラーン（吉兆の合の持ち主）称号の採用、祖先の系譜と王朝伝承の創造、王朝滅亡までの歴史が説かれる。

本書の特色は、上述の論点が、著者の長年の研究成果と国内外の研究蓄積にもとづき呈示されており、同王朝と前後の時代の多言語一次史料が数多く引用され、史料間の記述の異同とその理由が細かく分析されている点である。本書はティムール朝のテュルク・モンゴルの慣習・制度や考え方を重視しつつも、同王朝を「中央ユーラシア」と「ペルシア・イランやイスラーム」からの視点から捉えるという困難な課題に対する精励の結晶である。



黒木英充（編著）

『シリア・レバノンを知るための六四章』

明石書店、二〇一三年

杉本 悠子

早稲田大学大学院文学研究科博士
後期課程

明石書店エリア・スタディーズシリーズのうちの一冊として刊行された本書は、シリア・レバノンの二つの国を対象とする。アラビア語で言う「シャーム」、つまり「歴史的シリア」の一部であったシリア・レバノンはオスマン帝国崩壊後、フランスの委任統治時代を経て、別々の国として独立した。この二つの国には様々な違いもあるが、互いの関係は深く密接で、本書でも一まとまりとして論じられる。

本書は六四の章と一〇のコラムで構成されている。前半（I～VII部）では主に、地理、歴史、政治経済を扱い、特に歴史では二〇〇万年前から現在までを、イスラーム以前、イスラーム以後、シリアにおけるバアス党支配、レバノンの宗派別政治体制、ハリーリー元首相暗殺以降に分けて概観し、後半（VIII～X部）では人々の営為に焦点を当て、伝統的な暮らしや豊かな食文化

が生き生きと描かれる。また、世界各地で活躍するレバノンからの移民の存在がクローズアップされる傍ら、教育や雇用、結婚問題などレバノンが抱える新たな問題も指摘されている。そして最後に、文学・音楽・映画・演劇といった多彩な分野の文化が紹介されている。

多様な宗教宗派に加え、支配者や外国勢力の介入など様々な要素が重層的にからまる複雑なシリア・レバノンの歴史・政治に平易な文章で解説が加えられているのが本書の特徴であり、また、Ⅶ部やⅧ部で語られる執筆者の個人的な体験談から、シリア・レバノンの人々の日常の様子を垣間見ることができるとも、大きな魅力の一つとなっている。

現在シリアについては伝えられるのは、破壊や殺戮といったことばかりである。しかし、本書は、ニュースで見えるものとは異なったシリア・レバノンの多様で、魅力的な一面の存在を我々に強く訴える一冊である。



桜井啓子

『イランの宗教教育戦略——グローバル化と留学生』

山川出版社、二〇一四年



杉山 隆一

早稲田大学イスラーム地域研究機構
招聘研究員

本書は、イスラーム革命後から現在に至るまでイランで展開されてきたシーア派宗教教育に関する新たな戦略の内容を示し、特にその戦略の中で進められた国内外での女子宗教教育の充実や、新しい宗教教育の国際的な展開に焦点を当て、その意義を検討した著作である。

革命後に成立した政教一致国家のイランが進めたシーア派宗教教育システムの大規模な改革は、国是である「法学者の統治」の国内外への浸透・拡大という政治的な意図の下に進められてきた。その目的を果たすために、この改革の中では、公教育における新たな宗教教育カリキュラムの導入や、宗教学院の制度改革や多数の女子学院の設立、さらには宗教教育と人文社会系科目を織り交ぜた独自の教育を掲げて設立されたアル・ムスタファー大学の世界各国への進出や留学生獲得運動などの多様な施策が新たに進められることになる。そしてその結果、国内の女性や国外のシーア派信徒らに宗教的な高等教育の機会が新たに提供され、国内外での宗教女子学生の増加や彼女らの社会進出、さらにアル・ムスタファー大学の進出先となった国外の諸地域でのシーア派教育の普及・拡大が促されることになる。著者は改革で得られたこうした成果が、内外のシーア派信徒に対するイランの宗教都市ゴムの影響力の拡大に資す

るものとなっていると論じている。

以上が本書のあらましである。「法学者の統治」の支持拡大を図ることは、最高指導者の宗教権威の強化と、他のマルジャへの牽制に繋がる点で、イランの現在の革命体制の支配の正統性を強めるものとなる。本書では、こうした国家の生存戦略の一環として宗教教育が利用され、そのシステムが再編が図られていく様相が僅かな紙幅の中で詳細に述べられる。さらに、その戦略がもたらしたイラン及び各地での宗教教育の変化が、著者のフィールドワークによる具体例と共に生き生きと描き出されている。こうした点が本書の魅力となっている。著者は最後にアル・ムスタファー大学の今後の展開や卒業生の活動が、ゴムと各地のシーア派社会のこれからの関係発展の鍵であることを展望として述べているが、こうしたイラン型の宗教教育の展開がシーア派世界の勢力図をどう塗り替えていくのか、ぜひ著者のさらなる研究成果を待ちたい。



高橋圭

『スーフィー教団——民衆イスラームの伝統と再生』

山川出版社、二〇一四年



二宮 文子

青山学院大学文学部

准教授

巻頭において、本書の目的は、民衆イスラーム——「単なる教義や規範の体系としてではなく、民衆の素朴な信仰を取り込み、また彼らの生活の支えとなってきたイスラーム(三頁)」——の姿を、スーフィー教団の歴史と現状を通して描き出すことであると説明される。すなわち本書は、イスラームは厳格な一神教で規律・規範重視の宗教であるという認識を補い、また、思想を中心とした神秘主義運動であるスーフィズムは一三・一四世紀以降には大衆化してその活力を失った、という古典的理解を改めんとするものである。筆者が属する「スーフィズム・聖者信仰研究会」は、一九九〇年代からこのような方向性を打ち出して活動を続けており、学界内ではすでに一定の成果を上げていると言つてよい。そのような動向を踏まえた一般向けの書籍は、同研究会の成果に基づき、赤堀雅幸編『民衆のイスラーム』(山川出版社、二〇〇八年)以来である。

本書では、スーフィズムの初期史を扱う一章を除き、筆者が研究対象としてきたエジプトのスーフィー教団の事例が扱われている。エジプトは中世以来ムスリムの政治的・宗教的中心地の一つであり、現代もスーフィー教団の活動が認められる地域でもあるため、記述に一貫性をもたらす適切な地域設定である。第二章では、オスマン

朝時代のエジプト社会におけるスーフィー教団の役割が様々な方面から検討されている。第三章から第五章は近現代を扱い、それぞれ、一九世紀のイスラーム改革運動によるスーフィー教団批判、ムハンマド・アリー政権による教団管理制度、現代におけるスーフィー教団の再生と変容について解説されている。各章ごとに興味深い事例が続き、エジプト以外の地域のスーフィー教団の状況を分析する際にも有益な視点が得られる内容となっている。限られた紙面の中で、多岐にわたる論点が手際よく纏められた好著である。



小松久男

『激動の中のイスラーム——中央アジア近現代史』

山川出版社、二〇一四年

長沼 秀幸

東京大学大学院人文社会系研究科
博士課程

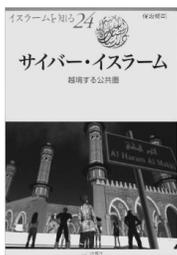
本書は、ロシアに併合された一九世紀後半から現代にいたるまでの中央アジア近現代史を、イスラームという宗教を切り口に論じる概説書である。四つの章と三つのコラムから構成されており、以下では章ごとに

その内容を紹介する。

第一章は、帝政ロシアの統治に対する現地社会のまなざしを、一八九八年にフェルガナ地方で発生したアンディジャン蜂起や、クリミア・タタール人の啓蒙思想家ガスプリンスキーによって始められたジャディード運動などを事例に論じる。第二章ではロシア二月革命からペレストロイカ期以前までを対象に、ソ連時代のイスラームを扱う。革命期のトルキスタンにおける自治構想、ソヴィエト政権によるイスラームの抑圧、第二次大戦期に創設された中央アジア・カザフスタンムスリム宗務局などを事例とし、ソヴィエト政権と現地イスラーム社会の多様な付き合い方を論じる。第三章は「イスラームの覚醒と再生」という視角から、ペレストロイカ期から現代に至るまでの中央アジアにおけるイスラーム復興の展開を描出する。「清浄な」イスラームへの回帰を目指した革新派の出現と、それによるムスリム共同体の分裂を危惧したヒンドゥスターニーら反対派の動き、ペレストロイカが保証した宗教の自由化をうけて促進された民衆レベルでのイスラームの広がりなどが紹介されている。一方、同時期に覚醒や再生と並行して進展したイスラームの政治化について論じるのが第四章である。ウズベキスタンのアブドゥワリ・カリ率いる革新派と宗務局の対立、革新派の教説に鼓舞された青年が組織した「アダーラト(正義)」や「イスラーム戦士団」などの急進派の活動、タジキスタン内戦の諸要因とその後などが紹介されている。

三つのコラムでは、それぞれ、タタール人汎イスラーム主義者のアブデュルレシト・イブラヒムの思想、前述のガスプリンスキーによるユートピア小説『安寧の国のムスリム』を通して見た彼のロシア・ムスリム社会の改革構想、著者小松氏の研究プロジェクトの一環で調査したコスタナイ（カザフスタン北部の都市）にあるモスクなどが紹介されている。

本書は、中央アジアにおいて「優れた耐性」を示したイスラームの歴史的動態を、ロシアによる征服から現代に至るまでの約一五〇年間にわたる変動の歴史の中に位置づけて活写している。イスラームを通して見る中央アジアの歴史と現在を知る上で格好の概説書であるといえよう。



保坂修司

『サイバー・イスラーム——越境する公共圏』

山川出版社、二〇一四年

井上 貴智

早稲田大学大学院文学研究科
博士後期課程

本書は、イスラーム諸国における情報通信技術の普及の過程から、近年の中東諸国



における社会運動とインターネットとの関連に関する議論まで、イスラーム地域とICTとの関わりを包括的に知ることができる書籍となっている。第一章では、アラビア語の輸入・表示などの技術的な背景および、各国におけるインターネットの導入・普及の状況と政府や当局による規制などに関して述べられている。第二章では、インターネット上におけるイスラームの宗教的活動について論じられている。特に、サイバー攻撃による、ネットワーク上のテロ行為に焦点が当てられている。第三章では、社会運動におけるインターネット関わりについて論じられている。特に、一連の「アラブの春」の動きにおけるソーシャルネットワークの貢献に関して再検証が行われている。第四章では、第二章を受け、大きな社会運動に繋がる要因に関し、さらに深い議論が行われている。伝統的メディアの影響力、携帯電話のメッセージサービスの役割、メディア・リテラシー問題について特に論じられている。

本書で最も目を引く議論は、一連の「アラブの春」運動の展開におけるソーシャルネットワークの貢献に関する従来の認識に対して、疑義を唱えているところにある。本書によると、デモの参加者層とインターネットのユーザ層の不一致や、現地の住民によるSNS利用方法と欧米への移民によるそれとのギャップなどを指摘することで、「アラブの春」におけるソーシャルネットワークの貢献は、補助的なものに過ぎないと結論づけている。

他にも、イスラーム系ウェブサイトの展開および変遷に関する情報や、イスラーム地域と欧米間のサイバー攻撃の経緯などに関し、詳しい説明がされており、イスラーム地域における情報通信技術と社会との関わりに関するあらゆる事項を知ることができるとなっている。また、現代生活を理解することにおいて切っても切り離せないインターネットに関して論じている本書は、現代ムスリム社会を理解するための必読書であると言えよう。



家島彦一

『イブン・ジュバイルとイブン・バットウータ——イスラーム世界の交通と旅』

山川出版社、二〇一三年

角田 絃美

日本学術振興会特別研究員／
早稲田大学大学院文学研究科
博士後期課程

本書は二人の歴史的人物を通じて、前近代イスラーム世界の「旅」について書かれた入門書である。うち一人は現在のスペインのバレンシアに生まれ、一二世紀に三度もメッカ巡礼の旅を行ったイブン・ジュ



バイルであり、もう一人は現在のモロッコのタンジェに生まれ、足かけ三〇年、数回の旅を通じてヨーロッパを除く既知の旧大陸を踏破した、一四世紀の大旅行家イブン・バットウータである。後者について一度はその名を耳にしたことがあるのではないだろうか？

本書にある二人の旅の足跡を表した地図を見ると、飛行機や鉄道の発達していない前近代に、何故こんなに長い距離を長い時間をかけて旅を出来たのか不思議に思う。それを解き明かしてくれるのが以下の四章である。

第一章では、二人の旅のきっかけや動機、旅程の紹介を通じて、長旅を可能にした前近代イスラーム社会の人々の心理的背景が、第二章では長旅を物理的に可能にした前近代の交通事情と、旅路を物理的・精神的に支えた、旅人を手厚くもてなすアラブの社会慣行が説明される。第三章では、彼らの旅を現代まで伝える媒体、即ちリフレラ文学（巡礼紀行文学）がどのような史料であるのか紹介される。それは、巡礼体験と各地の著名な学者や学校の詳細な情報とが描かれた、マグリブ独自の文学ジャンルである。二人の旅行記もリフレラ文学の形式を持ち、旅の手引書として多くの巡礼者や学問を志す人々に利用された。第四章では二人が旅先の様子をどう描いたのか、彼の他の認識の在り方が説明される。それは二人の育った環境や時代、生立ちと不可分である。

本書は「旅」を通じて前近代イスラーム

世界の「人」と「人」の繋がりや有様を知り、その魅力に気づきかけとなる良書である。なお二人の旅行記は本書巻末の参考文献リストにある通りいずれも邦訳が出版されている。本書に興味をもたれたら、是非実際の史料から活き活きとした前近代イスラーム社会に触れることをお勧めしたい。



青柳かおる

『ガザリー——古典スナ派思想の完成者』

山川出版社、二〇一四年

小倉 智史

日本学術振興会特別研究員

二〇一三年から刊行が始まった『世界史リブレット 人』シリーズ、全一〇〇巻からなるその目録を見ると、イスラーム史に関連する人物を扱った巻はそのうちの二〇巻超を占めている。世界史といえればヨーロッパ史か中国史か、という見方が強かった過去のことを思うと、隔世の感がある。ここ数十年のイスラーム史研究の蓄積の賜物と言えよう。さて今回このシリーズに加わったのは、古典スナ派思想の枠組みを完成させたとともに、中世におけるスー

フィズム隆盛の足場を築いたセルジューク朝時代の大思想家、アブー・ハーミド・ガザリーの巻である。

本書は序章と四つの章からなり、それぞれ「イスラーム思想史上の巨人」、「ガザリーとセルジューク朝」、「ニザミーヤ学院時代の活動」、「スーフィズムの探究」、「四 ガザリーと現代」というタイトルが付されている。ガザリーの生涯と業績を取り上げた一章、二章、三章では、彼が生きたセルジューク時代の政治体制、思想状況について周到な目配りがなされており、ガザリーがいかなる歴史的背景のもと自らの思想を深化させていったのが分かる。そして要所々々で挿入されている自伝的作品『誤りから救うもの』の引用から、ガザリーの深い苦悩、真理への渴望が伺われ、読者の心を揺さぶる。

また序章と第四章では、ガザリーがその代表的著作『宗教諸学の再興』所収の「婚姻作法の書」において避妊や中絶、女性の服装などに関する議論を残しており、彼の見解が現代のウラマーになお影響力を持ち得ていることが解説されている。ガザリーをもつばら哲学の批判者、スーフィーとして理解していた評者は、特に第四章で紹介されている、彼の女性問題に関する具体的な議論を非常に興味深く読んだ。イスラーム思想史のみならず、イスラームとジェンダーの関係に関心を持つ読者にも薦められる一冊と言えるだろう。



高野太輔
『マンズール——イスラーム帝国の
創建者』

山川出版社、二〇一四年

野口 舞子

お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科
博士後期課程

本書は、アッバース朝（七四九～一二五八年）の第二代カリフであり、王朝の実質的な創建者であるマンズール（七一三～七七五年）の生涯を書く。アッバース朝の君主としては、『千夜一夜物語』にも登場し、王朝の最盛期を代表する第五代カリフ、ハールーン・アッラシード（在位七八六～八〇九年）が有名だが、新都バグダッドの建設や、中央集権化に基づく国家体制を整えたマンズールは、その後の西アジアの歴史、ひいては世界史の流れを大きく変えた君主だと言うことができよう。本書の特徴は、このマンズールの生涯を、誕生の一〇〇年ほど前に遡り、預言者ムハンマドが没した直後からウマイヤ朝（六六一～七五〇年）期の混乱状態を経て、アッバース朝革命に至る政治状況にも多くを割いていることと、マンズールの治世前半に相当する、即位後の約一〇年に焦点を



当てていることである。相次ぐ反乱や勢力関係を一つ一つ丁寧にたどることで、初期の複雑な権力構造と政治的状況のなかで彼が覇権を確立するまでを分かりやすく描く。叔父や功臣の抹殺といった出来事は冷酷無残といった印象を与えるものの、豊富な逸話によって、知略に長けた非常に有能な君主という像が浮かび上がる。

さらに、本書は単なる君主伝というだけでなく、王都の建設や中央集権化に関する諸政策、当時の学問状況など、多様な側面から政治、社会状況が著され、その特徴がコンパクトにまとめられた、初期のアッバース朝史、初期イスラーム史として読むことも可能である。また、著者の専門は初期イスラーム時代の部族や系譜、軍事制度に関するものだが、近年はイブン・イスハーク著、イブン・ヒシャーム編註『預言者ムハンマド伝』（全四巻、共訳、岩波書店、二〇一〇～一二二年）や、本ジャーナルで掲載中のイブン・ハルドゥーン（二三三二～一四〇六年）自伝の翻訳なども精力的に行っている。本書においても、随所に織り込まれた逸話が、その場で見てきたかのように当時の状況を生き生きと伝えており、著者の面目躍如といったところである。

伝記としての読みやすさ・面白さと、歴史書としての専門性の双方を備えた非常に学ぶところの多い一冊である。



遠藤健太郎
『イラン人 このフシギな人々』

小野 亮介

慶應義塾大学大学院文学研究科
後期博士課程

本書は二〇一一年頭から二年弱の間イランの首都テヘランに研究留学した著者の体験を五〇のトピックにわけて綴ったエッセイ集である。イラン留学生の手記というと、革命前イランにおける自身の研究生活と市井の人々を描いた岡田恵美子氏の『イラン人の心』（初版一九八一年）を思い浮かべるが、本書にはほとんど市井の人しか現れない。それもそのはず本書の主な舞台は、外国人はめったに足を伸ばさないであろう旧市街・大バザールのほど近くにあるモストウフィーという横丁である。

著者は自身の研究対象である立憲革命期のウラマーが歩み、親しんだ風景を体験し、すべくこの横丁に居を構え、庶民の世界の中へ入り込んでゆく。不動産屋のアクバル、串焼き屋のクルド人ジャマル、肉屋のマフムードじいさんといった横丁の面々とのやりとりから著者が見聞きし学んだこと、おせっかいをせずにはいられない彼ら



から暖かく迎え入れられたこと、彼らの素朴さや誠実さ、あるいは旅行先での風景、それらは美しい記憶として読者にも伝わるだろう。時おり語られる著者の失敗談も可愛嬌だ。

しかし本書の魅力はそれだけではない。むしろより重要なのは、喧嘩、口論、中傷、配慮のなさ、厚かましき、ペテン、男性の性欲の強さなど、およそ目を背けたくなるようなイラン人の負の側面ではないだろうか。しかし本書においてそれらは単なる愚痴ではない。著者は心乱されながらも、イラン人と向き合い、彼らの「フシギ」さをじつと冷静に観察し続ける。そしてその観察はやがて革命体制へと向けられるのである。本書のトピックの一つである「こんなはずじゃ」や、イラン人がよく口にするというフレーズ「王様がいたころはよかった」は現代イランの混沌や閉塞感を的確に捉えている。「イスラム離れ」が急速に進んでいると著者が指摘するように、イラン人自身が見捨てようとしている自由の少ないこの国で、著者は「シンプルに生きる」ことを学んだと述べて本書を締めくくっている。イランはどこへ向かうのか。横丁の人々は四〇年になろうとする革命体制の先に、何を見いだすのであろうか。著者がイランを再訪する暁には、ぜひモストウフィー横丁へ帰省してもらいたい。



佐原徹哉

『中東民族問題の起源——オスマン帝国とアルメニア人』

白水社、二〇一四年

吉村 貴之

早稲田大学イスラーム地域研究機構
主任研究員

本書が扱っているのは、一九〇九年四月にオスマン帝国のアダナ州で発生したアダナ事件を中心とするオスマン帝国末期のアダナ州におけるアルメニア人社会とムスリム社会との関係を扱ったものである。アダナ事件は、アルメニア人の歴史家たちが第一次世界大戦中にオスマン帝国下で発生した「アルメニア人大虐殺」問題を考える上で必要不可欠な事象であると主張してきたことでその名が知られているわりに、事件の発生要因に関しては謎が多いままである。日本でも、設楽國廣「オスマン帝国におけるイスラムと民衆——青年トルコ人革命期を中心として」(『史潮』一八、一九八五年、六八—八三頁)など、部分的に事件を紹介したものもあるが、事件に正面から切り込んだのは本書が初めてとなる。

著者自身が分析上の視座として明確に主張しているのは、従来のアルメニア人の研

究の欠陥として、とかくこの事件が一八九四—九六年の「第一次アルメニア人虐殺」から第一次世界大戦の「アルメニア人大虐殺」へと単線的に連続する事件の一里塚としてとらえ、オスマン政府によるアルメニア人への迫害の側面ばかりを過剰に強調している点が挙げられる。その一方で、著者は、トルコの歴史学界を長らく支配してきた「アルメニア人虐殺」否定論の影響で事件をアルメニア系民族主義政党のダシユナク党による反乱とする定説を、この党が青年トルコ人革命当時政権を握った統一派(統一と進歩委員会)と協力関係にあった事実を無視し、これでは暴力の主体が民衆にあったことの説明にならないとして退ける。そのうえで、本論では一九世紀までに発生した他地域からアダナ州への政策的、経済的な人口移動と現地の独特な匪賊の存在と農業の発展に伴う住民の階層化が継時的に描写される。そして、後半では、定住遊牧民、ムスリム移民の上にアルメニア人などキリスト教徒の中間層が存在し、それをムスリム地主や地方名望家が支配するというアダナ州で特異的に発達した階層構造が革命を機に崩れ始め、ムスリム民衆とキリスト教徒中間層同士の相互不信が暴動に発展し、州政府の無為無策に拠って混乱に拍車がかかっただけでなく、それが周辺地域にまで広がっていく過程を詳述している。

本書には固有名詞の標記不統一などの技術的な問題があるものの、青年トルコ革命前後のオスマン帝国の地方社会の構造転換

を知るうえで貴重な問題提起をしている点では一読の価値がある。



加藤博

『ムハンマド・アリー——近代エジプトを築いた開明的君主』

山川出版社、二〇一三年

吉村 武典

早稲田大学イスラーム地域研究機構

次席研究員

本書は人物を通して歴史を知ることを中心セプトとした、山川出版社「世界史リブレット人」シリーズの第六七巻として刊行された。一九世紀前半のエジプトを統治し、近代化の父、開明的君主として知られ、エジプトの近代化を牽引したムハンマド・アリーを対象に、当時の東地中海のイスラーム地域を始め、ヨーロッパ列強との関係を含め、エジプトの地政学的な状況を踏まえつつ、エジプトにおける近代化政策を持つ意味を特に経済的な視点から問う内容となっている。

本書は以下のように構成されている。序章「ガゼルの目」を持つ人物、第一章「ムハンマド・アリーを生んだ東地中海世界」、第二章「ナイルの賜物」の国の変貌、

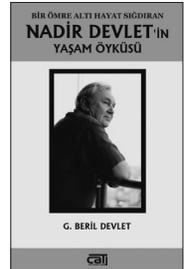
第三章「国家機構の整備」、第四章「帝国への野望と挫折」、第五章「ムハンマド・アリー統治の評価」。

本書でも述べられているように、ムハンマド・アリーをもつてエジプトの近代会の始まりとするかについては議論がある。しかし、彼が行った施策によりオスマン朝時代を通して継続されたマムルーク勢力によるエジプト支配に終焉をもたらし、富国強兵を目的に「エジプト」という国家的枠組みや国民意識を形成し、エジプトを地域として統合する萌芽となったことは明らかである。その意味でエジプトという地域内の社会と、広く東地中海世界のパワーバランスに影響を与えたことは明白である。

ムハンマド・アリーの近代化政策の最終的な目標は富国強兵であり、それをサポートする自立的経済の確立とそれに伴う工業化の達成であった。その目標に向け彼が行った政策の柱として、第二章では農業改革と農地の国有化、第三章では行政改革と兵制の近代化を取り上げる。特に第二章の農地の国有制をムハンマド・アリーの近代化政策の典型とする(三九―四〇頁)。この政策では農民の耕作義務を明確にするために「私有権」の文脈で行い、「所有権」に基づく国有制を採ったことが彼の政策の新しさであったとする。ただし、ヨーロッパの近代的な私有権とは本質的に異なることも指摘している。この問題の詳細については、同著者の『私的土地所有権とエジプト社会』(山波書店一九九五年)も参照されたい。

農業、行政、税制の改革を通じ、財源の一元化、集約化は、先に述べたように工業化による富国強兵を目指すものであった。これらの政策の成果は、一八二四年のギリシア出兵、一八三一年、一八三九年のシリア戦争に現れる。しかし、その結果エジプトは国際社会の一部としてヨーロッパ列強の干渉にさらされ、一八四〇年のロンドン条約により、ムハンマド・アリーの拡張政策は頓挫する。さらに、国内では農村の疲弊と反乱の発生、農地の国有制、工業化、国内産業の保護政策などが次々と破綻するなか、ムハンマド・アリーは一八四九年に死去する。

著者は最後に一九五二年の自由将校団による革命から、二〇一一年一月の民主化革命にいたるエジプトの変化を自立的な経済体制と開放的な経済体制との間で転換がもたらしたエジプト社会のダイレンマとして説明し、その原点がムハンマド・アリーとその統治にあるとする。それ故にムハンマド・アリーとその時代は、近代のみならず、エジプト社会の今日の問題を孕むものであるとする。二〇一一年の「アラブの春」以降、なかなか混迷を抜け出すことのできない中東アラブ地域の政治、社会、経済上の本質的な問題や構造をより広い視野から理解するために、本書を導入として一読されたい。



G. Beril Devlet

Bir Ömre Altı Hayat Sigırdan Nadir

Devlet'in Yaşam Öyküsü

Istanbul: Çatı Kitapları, 2014.

(G・ベリル・デヴレト『一度の生涯に六度の人生を合わせたナーディル・デヴレトの物語』イスタンブル、二〇一四年)

小野 亮介

慶應義塾大学大学院文学研究科

後期博士課程

トルコ共和国は旧ロシア帝国／ソ連より亡命・移住してきたトルコ系の同胞を積極的に受け入れてきた。本書はそうしたタール移民の生まれであり、革命期ロシア・ムスリム政治史の専門家としても著名なナーディル・デヴレト（一九四四―）の伝記である。著者はその妻であり、全体を通しての印象は、重厚な伝記的研究と云うより、その名の通りくだけた人物伝（*şah san öyküsü*）というものである。

本書では題名が示すように、ナーディルの人生が六つのステージに分けて語られる。最初のステージは誕生時、より正確にはアヤズ・イスハキーラと極東で行動を共にした両親についてだが、第二次世界大戦

の終結によって両親は赤子のナーディルを残しソ連に逮捕されてしまう。第二章は祖父と共に北京、上海を経てトルコへ移住する幼少期を扱ったもの。第三ステージからが本番で、ここではイスタンブルでの青少年期（一九四九―六三）や、在土タール人コミュニティの組織化が詳細に述べられる。本章では、時代は下るものの、ナーディルが編集長を務め、亡命者研究でも重要な位置を占める『カザン』誌（一九七〇―八〇）に関する記述が特に目を引く。

第四の人生では研究者との交流に加え、ミュンヘンの社会主義圏向け反共放送局「ラジオ・リバティ」に勤務した時代（一九七二―八四）を回想する。第五章のマルマラ大学教授時代からはかなり記録が細くなるが、その分単調な印象を受ける。一九九八年から現在までの第六ステージは老いてなおテレビ出演や学術活動に勤しむ様子が伝えられる。

以上駆け足で本書の内容を紹介したが、六度というのはやや大げさにしても、彼が研究者としての王道を歩んできたのではないことは確かである。こうした懐の広さはトルコ大学界の特徴の一つかもしれない。むしろ第五章以前の亡命タール人としての側面こそ、本書最大の特徴ではないかと、同様の問題に関心を持つ評者には感じられた。亡命者各個人に対するナーディルの評価は手厳しいところもあるが、大戦後の彼らの活動とその内幕を追う上で重要な証言と言えるだろう。